

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月23日現在

機関番号：82720

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2012

課題番号：22720098

研究課題名（和文） 聖教資料に基づく中世神道説の生成と展開に関する研究

研究課題名（英文） A study on the generation and development of medieval Shinto theory based on books possessed in a temple

研究代表者

高橋 悠介 (TAKAHASHI YUSUKE)

神奈川県立金沢文庫・学芸課・研究員

研究者番号：40551502

研究成果の概要（和文）：称名寺（横浜市金沢区）に所蔵される寺院資料中の中世神道に関する文献資料を中心に調査を行い、寺院文化圏内で形成された中世神道説とその背景について探求した。重要な神道関係資料については全文を翻刻し、解題を付して公開した。また、中世神道資料を生み出す母胎になったとみられる神道儀礼の存在を明らかにし、中世の説話や芸能論と神道説との関わりや、習合的性格を持つ荒神の図像の成立背景についても研究を進めた。

研究成果の概要（英文）：

I mainly investigated the books about medieval-times Shintoism in the literature possessed by Shomyo-ji in Kanazawa-ku, Yokohama-shi. I searched about the Shintoism theory formed in the temple at medieval times, and its background. I decoded the contents of the important Shintoism document and published the text together with description. Then, existence of the religious courtesy in which it seems that the medieval Shintoism document was produced became clear. Research progressed also with how medieval tales and performing-arts theory are concerned with the Shintoism theory, and the background of Kojin's iconographic image.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：中世文学・宗教思想史・神仏習合

1. 研究開始当初の背景

中世文学研究においては、文芸生成の媒体として古典注釈学の重要性が認識されるようになって以来、特に記紀にはみえないような神話言説、いわゆる中世日本紀に光があたり、中世神道説に対する関心が強くなっている。また、寺社縁起や靈験記、巡礼記とい

た寺社関係資料に豊饒な説話世界が広がり、文学や芸能として展開していることから、そうした資料の背景としても中世神道説が注目されるようになった。

近年では海外においても中世神道に対する注目が高まっている。欧米の研究者は、現在の日本の細分化された学問ジャンルにと

らわれない視野を持っている傾向があるが、実際、中世神道説の基盤やその波及する世界は、仏教学・歴史学・文学・美術史学・民俗学などが対象とする広い領域にわたっており、学際的な研究が有効である。

中世神道説に関する資料の中でも、称名寺聖教中の関係資料は、朝廷における国家祭祀の神祇信仰とは別の原理により、寺院文化圏内で生成し享受された中世神道説をうかがわせる貴重な中世資料である。

この密教を基盤とした神道関係資料にいち早く注目したのは榎田良洪氏であり、特に『真言密教成立過程の研究』（山喜房仏書林、1964年）第二編第三章「神道思想の受容」において、称名寺聖教をもとに称名寺二世長老釧阿にみられる神祇書の相承などを明らかにしている。

榎田氏以後、西田長男氏や納富常天氏により個々の資料の研究が進み、1996年に神奈川県立金沢文庫で開催された「金沢文庫の中世神道資料」展図録には「金沢文庫現存神道関係資料総目録」（津田徹英氏作成）が掲載された。同目録では、寺社や尊格ごとに資料を分類し、合計227点にのぼる資料が挙げられている。ただし、その後新たに発見された資料もあり、さらなる探索を行えば、今後も中世神道関係資料が見つかる可能性が想定された。

そこで、まずは称名寺聖教を改めて見直し、中世神道関係資料の原本調査を行い、内容を検討したいと考えた。その際、称名寺聖教だけでなく、他の寺社や機関に所蔵される関係資料も見渡していく必要がある。また、中世神道説には、図像資料とも深く関わる内容が含まれていることから、そうした図像・美術資料の調査も必要となる。その上で、個々の資料の内容を広い視角から分析することで、寺院文化圏内で生成・享受された中世神道説とその背景を探求し、理解を進めることができる考えた。

2. 研究の目的

本研究では、寺院文化圏において生成・展開した中世神道説や神祇関係説話を分析し、その背景を解明することを目的とする。

そのため、金沢文庫保管称名寺聖教（重要文化財）中の鎌倉・南北朝期に書写された二百点以上にのぼる神道関係資料の調査を中心に、中世神祇書の古写本を所蔵する寺社や機関の資料を調査対象とし、神道関係資料の書誌調査を行い、これをまとめた上で、中世神道説の体系的な理解を目指す。

特に注目すべき資料については、原本調査に基づく良質な翻刻本文を提供すると共に、総合的な研究を行い、関連する文芸や図像資料についても教説や神道儀礼との有機的関

連を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 称名寺聖教を中心とした神道関係資料の調査

寺院文化圏における中世神道説の生成・展開を解明するための基礎作業として、まず称名寺聖教全体を見直し、原本調査と写真撮影により、新発見資料も含めた神道関係資料の書誌をまとめる。さらに、中世神道関係資料の古写本を所蔵する他の寺社や関連機関の調査も行い、関連資料を比較することにより、中世神道説の体系とその背景について研究を深める。

(2) 重要な神道関係資料の翻刻

特に注目すべき資料については、全文翻刻を行い、解題を付して公にし、広く研究者が用いることができる良質な本文を提供する。

(3) 中世神道説の広がりとその背景の解明

神祇関係説話や芸能などに展開した中世神道説の広がりとその背景を明らかにし、図像資料の調査も行って、文献資料との有機的関連を明らかにする。

4. 研究成果

(1) 寺院聖教中の中世神道資料の調査・研究

称名寺聖教については、「金沢文庫現存神道関係資料総目録」（津田徹英氏作成、1996年）等を参考にしながら、全体を改めて見直し、書誌調査を行った。その結果、『（jaH-jaH）次第』『（jaH-jaH）口決』をはじめ、従来注目されていなかった神道関係資料を複数見出すことができた。また、聖教の書誌形態や筆跡の検討から、個々の聖教の関連性などが判明した例もある。必要に応じて、一部の聖教については写真撮影を行い、画像データを整理した。

また、称名寺聖教中の中世神道資料と関わる外部機関の寺院資料についても調査を行った。近年、中世神道儀礼で使われる神体図・本尊図に関する図像学の重要性が指摘されているが、そうした図像の一つに釧図が挙げられる。2010年7月には、真福寺宝生院大須文庫（名古屋市中区大須）所蔵の中世神道資料、特に釧図関係資料『法釧図聞書』『宝釧図注』『神体図記』等の資料の調査を行った。これは、称名寺聖教中の『塔釧図』に関連する資料であり、図像の比較を行うと共に、称名寺聖教『塔釧図』だけからはわからない注釈的情報等を得ることができた。

(2) 重要な中世神道資料の翻刻

称名寺聖教中の中世神道資料の中でも、重要なものについて、翻刻を進めた。研究期間中に全文翻刻を公にすることができたものとしては、『（jaH-jaH）次第』『（jaH-jaH）口決』『日本得名』の三点がある。この三点については、『金沢文庫研究』に解題を付して全文を翻刻紹介した。

『（jaH-jaH）次第』『（jaH-jaH）口決』は孤本である一方、『日本得名』の伝本には高野山三寶院文庫本が知られている。しかし、称名寺二世長老阿手沢の称名寺本は鎌倉後期写の善本である上に、独自の本文もみえる。さらに、その本文の筆跡は、御流神道の成立に関わった可能性も論じられている秀範の手と思われることから、思想的にも重要な意義を持つものである。

また、高野山大学図書館蔵高野山三寶院寄託本『荒神縁起事 付霊瑞』を翻刻し、他伝本三本との主要校異と解題を付して紹介した。同書は、日本の神仏習合の中で生まれた神格、荒神に関する資料で、その成立は鎌倉末期に遡り、荒神の図像に関する資料としても重要な情報を含んでいる。

→5 雑誌論文①④⑧参照

(3) 知られざる中世神道の儀礼と、中世神道説の生成背景の解明

(2) で言及した称名寺聖教『（jaH-jaH）次第』は、断片的な聖教ながらも、これまで知られていなかった一種の神祇灌頂（神道儀礼）の次第を示すものとみられる。また、『（jaH-jaH）口決』は、この儀礼の口決として、日本開闢や天岩戸の神話、内侍所の鏡などを密教的に解釈した中世日本紀説が展開された資料である。この二点の資料をあわせ考えることで、寺院圏内での中世神道説が密教的な神道儀礼と密接に関わりつつ生成していることや、神道説と『瑜祇経』の関わりも具体的に明らかになった。

実は、称名寺聖教中には、天照大神と十一面観音の習合説に愛染明王が結びついていく様相を物語る中世神道資料が複数あるが、『（jaH-jaH）口決』はこうした習合説を考える上で重要な資料でもあり、翻刻に付した解題では、そうした意義に言及した。

→5 雑誌論文⑧参照

また、称名寺聖教『日本得名』には、伊勢の内宮の神体を金色の蛇形であるとする記事がみえる。さらに、神を人間の心の中に内在的に捉える発想が顕著にうかがえ、内容に社参作法「伊勢灌頂」と深く関わる思想がうかがえる点などを指摘した。これまで知られていた「伊勢灌頂」関係資料は近世に下るものが多く、そうした意味でも貴重な中世資料であることが明らかになった。

→5 雑誌論文①参照

(4) 中世神道説と中世文芸の関わり ①『春日権現験記絵』と春日大明神をめぐる唱導との関わり

日本の絵巻の名品として知られる『春日権現験記絵』の生成過程に関しては、解脱房貞慶の活動が注目されてきた。特に、狛行光の春日霊験譚は『春日権現験記絵』だけでなく、それ以前に『教訓抄』にも採録されており、同書では貞慶の『御社験記』（春日霊験譚の集成と思しい）にこの説話が収められており、説法にもたびたび使われていたという。

『御社験記』そのものは現存していないが、称名寺聖教の『狛行光事^{付大明神}』を検討した結果、興福寺で使われたことが明確な本文を有する説草で、『御社験記』の輪郭を示唆する最も重要な資料であることが明らかになった。

称名寺聖教中には、他にも『春日権現験記絵』と関連の深い資料があり、『覚称得業事』や貞慶の『春日御本地尺』などをあわせて分析し、春日大明神に関わる貞慶の著作において孝養が重要なモチーフになっている意味や、貞慶の唱導と春日関係神祇書の生成について、論文にまとめた。

また、平成24年4月から7月にかけて奈良国立博物館および神奈川県立金沢文庫において開催した特別展「解脱上人貞慶」の中では、称名寺聖教中の春日社関係資料を展示し、春日信仰の展開における貞慶の意義を論じた解説を加えて、研究成果の一端を示した。
→5 雑誌論文③⑤参照

②中世神道説と能楽論の関わり

近年、人間が母胎で成長する過程を五段階に分けた胎内五位説の第一段階「羯頼藍」に相当すると思われる「一水」や「一露」といった概念が、中世神道説の中で重要な役割を果たしていることが、小川豊生氏によって指摘されている。こうした状況をふまえ、中世芸能の身体論における「一水」「一露」の意義や、身体の根源を示すこうした概念が世界の根源と重ねあわされる理論的な背景についても、研究を進めることができた。

金春禅竹が図形を用いて能の生成を説明した能楽論体系「六輪一露説」においては、「一露」が「無上の重位」とされているが、能楽論にこうした胎生学の用語が取り込まれる背景には、音の生成を身体の源に求めて遡源する音律論が媒介となった可能性や、舞歌が不浄の身体から発生するという禅竹能楽論の特質についても論じた。また、「一露」は劔の形で表象され、「一露」は「一水」のはじめと位置づけられているが、『麗気記』神体図の末注には劔図を「一水」と結びつける例がみられ、直接的影響はないにしても共通性がうかがえることを指摘した。

「一水」「一露」という用語は、身体の根源としての「赤白二諦」や、水の種子としての鑿字とも結びつき、中世神道の中で理論化された。この理論化にあたっては、『金剛頂経』の注釈書『金剛頂大瑜伽秘密心地法門義訣』の「鑿字法界種、相形如円塔」という句が関わっていることを、称名寺聖教の『醍醐三宝院灌頂口決 中性院』や修験道の切紙類を通して論証した。この句をふまえると、中世を代表する神祇書『麗気記』にみえる「法界元初ノ一水」といった表現の背景なども理解できることになる。こうした問題についても、論文にまとめて報告した。

→5 雑誌論文⑥⑦・学会発表④参照

(5) 中世神道説と関わる図像・美術資料の調査・研究

特に、中世神道説と愛染明王の関わりに注目し、愛染明王関連の図像・美術作品の調査を行った。具体的には、愛染明王坐像(奈良・西大寺蔵)、愛染明王像(同)、愛染田夫本尊(同)、黒漆大神宮御正体厨子(同)、伝神倉神社出土・愛染明王懸仏(個人蔵)、伝小町塚出土・吽字連記瓦経(個人蔵)などについて、詳細な調査を行った。

中でも、西大寺の黒漆大神宮御正体厨子については、叡尊の伊勢参宮と関わる納入文書の内容を検討し、その成果を戒律文化研究会において報告した。この報告においては、納入文書に含まれる「大神宮啓白文」を、宮中清涼殿二間での愛染明王供養などと合わせて検討し、天照大神と愛染明王の同体説の源形が仁和寺の保寿院流において形成された可能性などを指摘した。

→5 学会発表③

神奈川県立金沢文庫で平成 23 年 10 月 15 日から 12 月 4 日まで開催した特別展「愛染明王」においては、三章立ての展示構成のうち最終章を「中世神道説における愛染明王」として、称名寺聖教の中世神道資料のうち愛染明王に関わる聖教類を、関連する造形作品と共に展示し、解説を加えて研究成果の一端を示した。同展覧会の図録でも、中世神道説における愛染明王の意義について、総説やコラムの中で論じた。

→5 図書①

また、愛染明王や『瑜祇経』注釈学とも関わる荒神の図像について、三重県・徳楽寺所蔵の如来荒神曼荼羅図と、奈良県・吉祥草寺蔵の三宝荒神像の調査を行い、この二幅を中心に分析を加え、如来荒神の像容の特徴とその成立背景を明らかにする論文をまとめた。そして、荒神が特に修験道で重んじられた経緯と、荒神をめぐる教説の形成と歴史的展開について、韓国・国立慶尚大学校慶南文化研究院主催のシンポジウムにおいて報告し、中国・朝鮮半島における山岳信仰の研究者とも

意見交換を行った。

→5 雑誌論文②・学会発表②参照

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 8 件)

- ① 高橋悠介、「金沢文庫の中世神道資料『日本得名』一翻刻・解題一」、『金沢文庫研究』(神奈川県立金沢文庫)、査読有、329 号、43-48 頁、2012 年
- ② 高橋悠介、「荒神の図像について—如来荒神を中心に—」、仏教美術論集第二巻『図像学 I—イメージの成立と伝承』(竹林舎)、査読無、334-349 頁、2012 年
- ③ 高橋悠介、「貞慶の春日信仰—称名寺聖教を通して—」、特別展図録『解脱上人貞慶—鎌倉仏教の本流—』(奈良国立博物館)、査読無、208-211 頁、2012 年
- ④ 高橋悠介、「高野山大学図書館蔵高野山三宝院寄託本『荒神縁起事 付霊瑞』翻刻・紹介」、『巡礼記研究』(巡礼記研究会)、査読有、第 8 集、55-73 頁、2011 年
- ⑤ 高橋悠介、「称名寺聖教中の春日関係資料と『春日権現験記絵』」、『説話文学研究』(説話文学会)、査読有、46 号、29-40 頁、2011 年
- ⑥ 高橋悠介、「禅竹能楽論における「一露」「一水」と胎生学」、『能と狂言』、査読有、第九号、56-69 頁、2011 年
- ⑦ 高橋悠介、「能と国土生成神話」、中世文学と隣接諸学③『中世神話と神祇・神道世界』(伊藤聡編、竹林舎)、査読無、528-548 頁、2011 年
- ⑧ 高橋悠介、「金沢文庫の中世神道資料『jaH-jaH 次第』『jaH-jaH 口決』一翻刻・解題一」、『金沢文庫研究』(神奈川県立金沢文庫)、査読有、326 号、29-44 頁、2011 年

[学会発表] (計 4 件)

- ① 高橋悠介、「The concept of the National Land, and the syncretism of kami worship and Buddhism (国土観と神仏習合)」、国際シンポジウム“National Identity and Religion”(フランス共和国・CEEJA)

[Centre Européen d'Etudes Japonaises d'Alsace]・法政大学国際日本学研究所他主催)、2012年11月2日、フランス共和国・CEEJA

- ② 高橋悠介、「日本の修験霊山と荒神」、国際修験道シンポジウム(韓国・国立慶尚大学校慶南文化研究院主催)、2012年2月10日、韓国・慶尚大学校南冥館106号室
- ③ 高橋悠介、「黒漆大神宮御正体厨子・納入文書小考―大神宮啓白文を中心に」、戒律文化研究会第十回学術大会、2012年1月21日、神奈川県立金沢文庫)
- ④ 高橋悠介、「禅竹能楽論における「一露」「一水」再考」、能楽学会大会、2010年5月15日、早稲田大学

[図書](計1件)

- ① 高橋悠介・編、特別展図録『愛染明王―愛と怒りのほとけ』(神奈川県立金沢文庫)、1-87頁、2011年

[産業財産権]

- 出願状況(計0件)
- 取得状況(計0件)

[その他]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 悠介 (TAKAHASHI YUSUKE)
神奈川県立金沢文庫・学芸課・研究員
研究者番号：22720098

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号：